

## ニューヨークにおけるヘボン

渡 辺 英 男

### James Curtis Hepburn in New York

Hideo Watanabe

#### Abstract

Hepburn came to New York in 1846 after his five year stay in China as a missionary. He lived in Midtown Manhattan at 159 West 42<sup>nd</sup> Street. At that time, the city had a population just under 700,000 and the surrounding land was still sparsely inhabited.

He was a medical doctor and treated many poor patients, for the entire city suffered from cholera. The young man devoted himself to medical treatment and church activities. His church was the Forty Second Street Presbyterian Church. Its address was 139 West 42<sup>nd</sup> Street, just a few minutes' walk from his residence.

Although his business was a great success, his private life was unfortunate; he lost three children who were all born in New York. He wanted to leave such a tragic town; meanwhile, the Board of Foreign Missions gave him the opportunity to travel to Japan as a medical missionary. His transfer from New York to Japan was not

without risks. One big problem was that the couple had to leave their son Samuel alone in New York. Also, Japan still enforced the seclusion policy and the Japanese had strong negative feelings towards foreigners.

Why did he dare to go to Japan under such difficult conditions? A man of good faith, he believed that God led him to go and help people there. The couple left for Japan in 1869.

## はじめに

昨年、明治学院大学キリスト教研究所の紀要第44号で「イースト・オレンジにおけるヘボン」を発表させていただいた。その中でも述べたが、ヘボンのアメリカの生活は大雑把に三つの時期に分けられる。ペンシルバニア州ミルトンの時代、ニューヨーク州マンハッタンの時代、そしてニュージャージー州イースト・オレンジの時代である。そのうち本稿の「ニューヨークにおけるヘボン」はマンハッタンの時代にスポットを当てている。ヘボンが31歳から44歳の開業医をしていた働き盛りの13年間である。年号でいうと弘化3年（1846年）から安政6年（1859年）の時代であり、日本では嘉永6年（1853年）にペリーの黒船艦隊が浦賀に入港し、鎖国が終わり、近代国家の幕開けの頃に相当する。

本稿の舞台となるニューヨーク市のマンハッタンは、私の住むニュージャージー州のウエイン（Wayne）市<sup>(1)</sup>から直行バスで一時間の近距離にあり、ヘボンの家は、このバスの終点であるポート・オーソリティー・バスターミナル（Port Authority Bus Terminal）から徒歩数分のところにある。古い地図などを保存しているニューヨークの情報の宝庫ともいえるニューヨーク公共図書館（New York Public Library）も近く、ポート・オーソリティー・バスターミナルから徒歩10分の距

離にある。さらにはヘボンのニューヨーク時代の教会のデータがまとまって所蔵されている長老派歴史協会（Presbyterian Historical Society）のあるフィラデルフィア（Philadelphia）までバスで2時間である。このような恵まれた地理的環境に生活し、4～5年の調査・研究の結果をこの論文に発表することになった。

日本におけるヘボンについての先行研究は沢山あるが、ニューヨークにおけるヘボンを調査した論文はあまり存在しない。その中で山本秀煌は『新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』でニューヨークのヘボンのことについて触れている。また高谷は『ドクトル・ヘボン』、『ヘボンの手紙』、『ヘボン』の各著でヘボンのニューヨークの様子を伝えている。司馬は2009年に「アジアが遠くにあった頃—ヘボンのアメリカ—」を発表し、その中で、「第2編 青・壮年期のマンハッタン—1859年4月24日のニューヨークまで—」の部分は、ヘボンに関してマンハッタンの具体的な情報を提供している。

調査・研究にあたってできるだけ過去の研究がカバーしていない内容を扱うことに努めた。また同じ分野でも、過去に伝説的に信じられてきている事柄に対して、新しいデータを集めて実証的に説明し、別の見方を提示しているところもある。内容的には特に当時のニューヨークの様子、ヘボンの住居と診療所、ヘボンの通っていた教会、ヘボンのニューヨークにおける人間関係を論じている。「結びの言葉」では、各章をまとめ、そして最後の「ヘボンにとってニューヨークとは」という項目で、ヘボンがニューヨークに来た理由、ヘボンがニューヨークを去って日本伝道に出かけたいきさつについて論じている。

この研究に際し、日米共に多くの方々から多大なご支援を頂いた。日本では明治学院大学関係の方々、米国ではフィラデルフィアの長老派歴史協会やニューヨーク公共図書館に勤めるの方々から大変お世話になった。この場をお借りして厚くお礼を申し上げたい。

## 1章 ニューヨークという地 ― 昔と今

### 1節 ヘボンの住所

ヘボンが東洋伝道を終え、ニューヨークに上陸したのは1846年3月15日のことである。1845年11月30日にマカオを離れ、パナマ号に乗船し40日以上長い船旅であった(司馬 2009: 179)。ボストンを出発して東洋に向ってから5年目である。3月のニューヨークは寒い。まだ雪も降る厳しい季節である。ペンシルバニア州の生まれのヘボンにとって、ニューヨークは未知の土地であった。

高谷は『ヘボン』の中で、「ヘボンがニューヨークで病院を経営していた三十三年はあたかもアメリカ資本主義の勃興期であった。南部における綿花の産額は驚異的に増加し、北部地方のフロンティア運動(西部の開拓)は大きいうねりをなして、移住民が西へ西へと前進していった」(1986: 37)と、19世紀のアメリカを説明している。また『ヘボンの手紙』で当時のニューヨークについては次のように述べている。「当時は米国が独立して七十年を経過したばかりの時代で、ニューヨーク市といえども、まだ盛大な港都ではなかった。中心街は海岸から十四番街までであった。であるから四十二番街はずっとへんぴな町はずれに近い場所であった」(1976: 11-12)。ここでいう四十二番街とは、現在のマンハッタンの42nd St. 四十二丁目のことである<sup>(2)</sup>。そして四十二丁目といえば、ネオンきらびやかなタイムズ・スクエアを連想するが、当時は「ずっとへんぴな町はずれに近い場所」であったことを記憶に留めておこう。

ニューヨークの入植はマンハッタン南端のローワー・マンハッタン(Lower Manhattan)から始まる。入植は19世紀初め頃に盛んになり、アイルランド人、ドイツ人、イタリア人、ユダヤ人、中国人、アフリカ

系アメリカ人など、世界中の民族が食料飢饉や徴兵制を逃れるなど様々な理由でやってきた。ローワー・マンハッタンにあるチャイナタウンやリトルイタリアなどのコミュニティーはそういう歴史的背景のもとに形成された<sup>(3)</sup>。



図1-1 マンハッタンの地図

ニューヨーク市の人口は1840年は40万人弱であったが、1850年には70万人弱になり、そして1860年には120万人弱となる。それぞれ10年ごとに+61.4%、+78.0%、+68.8%の率で伸びていて、この人口増加率はニューヨーク市の歴史の中でも際立っている。このように急成長を遂げる街に足を踏み入れてみるが、ヘボンはマンハッタンのどこに居住地を見つけたのであろうか。



図1-2 19世紀のマンハッタン

ヘボンの住所が初めて明らかになるのは、1850年である、ニューヨーク市住所録（New York City Directory）に次のように載っている（司馬 2009: 185）。

Hepburn James C. physician, h. W. 42d n. Av. 8

ジェームズ・C・ヘップバーン、医者、住宅、西42丁目 8番街近く

n. はnear「近く」の意味である。その年では住所に家番号はないが、

その後、1858年には「8番街の近く」という言葉はなくなり、次のように「159」が記されるようになる。

Hepburn James C. physician, h 159 W. 42d

ジェームズ・C・ヘップバーン、医者、住宅、西42丁目 159番地

h はhouse「住宅」の意味である。これと同じ表記が1859年5月1日まで続き、1859-1860以降は住所の記載自体が無くなる。来日のためヘボンは1859年4月24日（司馬 2009: 203）にニューヨークを離れたためである。

## 2節 ヘボンの住居

1882年3月30日付のTHE JAPAN WEEKLY MAIL『ジャパン、ウイークリー、メール』（6頁）によると、「私達はニューヨーク市に到着し、そこで13年間医療に従事しました。42番街に素敵な家を見て、そして立派な診療所を建てました」とあり、ヘボンは西42丁目159番地に住み、そこで医師として診療所を開業する。

その西42丁目159番地の土地は、不思議なことに不動産譲渡書<sup>(4)</sup>を調べてみても、ヘボンの名前は見当たらない。何故だろうか。見当たらないということは、ヘボンがニューヨークに来た1846年、その土地の所有者はヘボンではなかったと考えられる。不動産移動書によると、西42丁目8番街近くの地所は1846年10月1日にムーアー・ヘンリー（Moore Henry）からフォクス・マービン・ダブリュウ（Fox Marvin W）に譲渡されている。その後、1849年5月5日にジェームズ・カーティス・ヘップバーンがその地所をフォクス・マービン・ダブリュウから\$1,200で購入するという記述がある。しかしヘボン自身の言葉として「1846年の夏に医院を開業している」というのであるから、考えら

れることはヘボンは家を賃貸して、そこで診療所を開いていたということになる。つまりヘボンはマンハッタンに住み始めた当初、すぐ家を買う準備がなく、ムーアー・ヘンリーから家を賃貸して診療所を開設したのではないだろうか。そして1846年10月以降、フォクス・マービン・ダブリュウがその地所の所有者に変わると、ヘボンは引き続きフォクスから地所を借りたと推察される。この時の住所は既に述べたニューヨーク市西42丁目159番地（159 West 42<sup>nd</sup> Street, New York）であり、その住所は日本に行く1859年まで続く。

来日にあたって、ヘボンは自分の地所を処分する。弟、スレーター（Slator C. Hepburn）に宛てた1859年2月3日の書簡によると、“I have sold my house for \$10,000.”とある。不動産譲渡書を見ると、1859年3月3日にマーガレットL. キャンベル（Margaret L. Campbell）にその地所を売却したことがわかる。このマーガレットL. キャンベルとは誰か。42丁目長老教会の会員番号64番に同じ名前が載っており、未亡人となっている。おそらくヘボンは自分と同じ教会の気心の知れた教会員、マーガレットに家を買ったのであろう。会員名簿のマーガレットL. キャンベルの欄には36th between 8<sup>th</sup> & 9<sup>th</sup> Streetの住所が抹消されているので、マーガレットは西42丁目159番地に引っ越す前は、その住所に住んでいたであろう。それ以降、その地所はヘボンとは直接関係のないと思われるところに渡る<sup>(5)</sup>。

ヘボンの家があった場所は現在どうなっているであろうか。1980年から、西42丁目159番地の区画は、犯罪防止のためニューヨーク市によって整理され、全く様相を異にしており、ヘボンの住んだ家らしき建物は現存しない。「ジェームス・カーティスの家があったあたりは吉野家牛丼チェーン店とリーガル・シネマ（Regal Cinema）という映画館の入口になっている（司馬 2009: 197）。その場所は現在のポート・オーソリティー・ターミナルから徒歩数分のところにあり、タイムズ・

スクエアーにも近く、マンハッタンの中心地ともいえるべき場所である。ちなみに吉野家牛丼チェーン店は2012年に閉店された。

### 3節 地図上のヘボンの家

#### 1) ドリップス・マップ (Dripps Map) (1852年)<sup>(6)</sup>

前節ではヘボンの住居を不動産譲渡書に基づいて検討したが、ヘボンの家は地図上ではどうなっているであろうか。ニューヨーク公共図書館員によると、ニューヨークは火災が多く、当時描かれた地図は保険会社の手によって作成された、とのことである。地図上にヘボンの家が初めて現れるのはドリップス・マップ (Dripps Map) (1852年) (写真1-1) である。

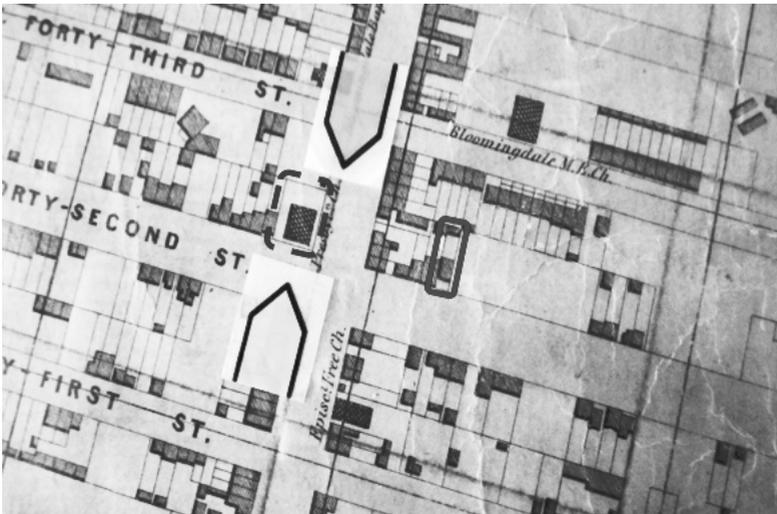


写真1-1 ドリップス・マップ (1852年)  
実線がヘボンの家、破線が42丁目長老教会

司馬も「42ndストリート@8thアヴェニュー周辺、ジェームス・カー

ティスの地所建物がすでにある」(2010:195)と述べている。この地図におけるヘボンの地所には、二つの黒く塗りつぶした部分がある。大きな部分はおそらくヘボンの住居兼診療所であろう。そして小さい部分は馬屋と思われる。「ヘボン夫妻は少年サムエルを連れ、安息日の午後など、教会から帰る途中、馬車でイースト・オレンジのローズデール墓地を訪ね、小さい三つの墓石の前にたたずんだ」(高谷1968:36)とある。当時のマンハッタンの交通手段は馬であり、バスや地下鉄、トロリーバスが一般化するのには20世紀になってからである。ヘボンの地所のすぐ東側には大きな空白があり、空き地だったであろう。高谷の「四十二番街はずっとへんぴな町はずれに近い場所だった」というのはこの地図からも想像できる。

## 2) ペリス・マップ (Perris Map) (1857年)

ペリス・マップ (1857年) (写真1-2) においてもヘボンの家は見られる。1859年にヘボンはニューヨークを離れるので、ヘボンの家の最後の頃かもしれない。地所の場所はドリップス・マップと同じだが、よく見ると建物はそれまでに随分変わっている。ドリップス・マップ (1852年版) では42丁目に面した建物の間口が空白になっていたが、ペリス・マップではその部分は42丁目まで伸びている。さらに、その建物の中ほどの右の部分が一部突起している。一番奥の部分はドリップス・マップにもあるが、これは馬屋であろう。当時馬は貴重な交通手段で、医者であるヘボンは時に馬車を使って往診に出かけていたのではないだろうか。

## 3) ドリップス・マップ (Dripps Map) (1867年)

次の地図は1867年のドリップス・マップである (写真1-3)。この年はすでに所有者がヘボンからマーガレットL. キャンベルに変わってい

ニューヨークにおけるヘボン

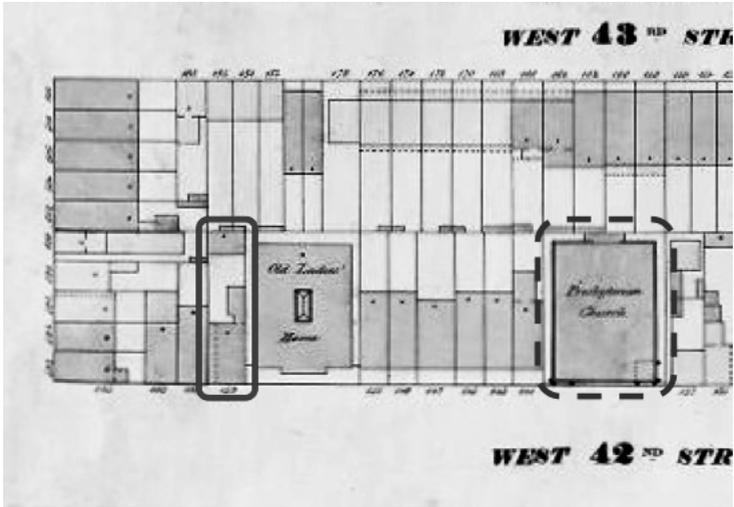


写真1-2 ペリス・マップ(1857年)  
実線がヘボンの家、破線が42丁目長老教会

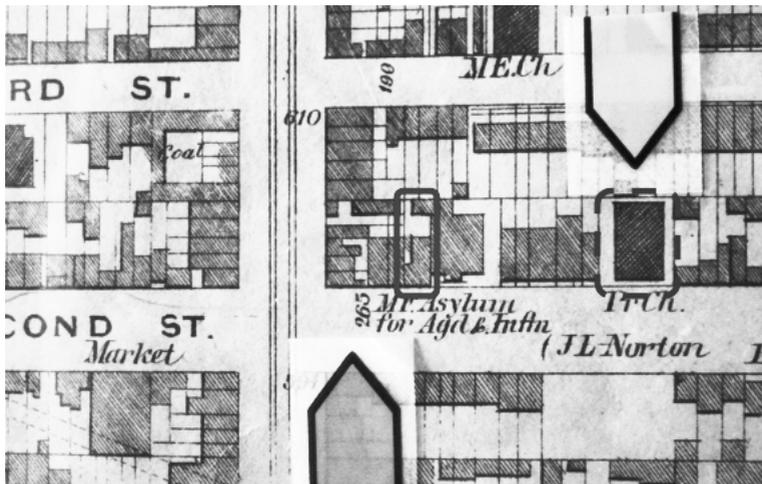


写真1-3 ドリップス・マップ(1867年)  
実線がヘボンの家、破線が42丁目長老教会

る。1867年のドリップス・マップは1857年のペリス・マップと似ているが、ヘボンの地所の左の隙間が少し狭くなっている。これはヘボンの所有の段階で、建物の増設が行われたからかもしれない。さらにもう一つの特徴は、ヘボンの時代に馬屋と思われた一番奥の建物の左の部分が縮小されて、少し隙間が空いている点である。

#### 4) ロビンソン・マップ (Robinson Map) (1885年)

次は1885年のロビンソン・マップ(写真1-4)である。マーガレットL. キャンベルはヘボンの地所の跡地に1859年から1897年の38年間住むわけだが、1885年では建物全体がかなり縮小されている。42丁目沿いの地所の三分の一しか建物がなく、奥の方は全て空白となっている。マーガレットL. キャンベルの職業はわからないが、ヘボンが診療所として使っていたであろう建物は必要ないためか取り壊されている。また1885年には馬車の需要も減りつつあるため、馬屋と見られる建物は消えている。

#### 4節 地所の広さ

以上、同じ地所でも建物自体は時代の経過と共に変わって来ている様子がわかる。次にヘボンの地所の広さについて考えてみる。ヘボンは1849年にフオクス・マービン・ダブリュウから西42丁目159番地の地所を譲り受けるわけであるが、その時の不動産譲渡書によると地所は25 X 100.4 feetとなっている。メートルに直すと42丁目沿いの間口が7.62メートル、8番街に並行した奥行きが30.60メートルである。1916年6月19日にヘボンの不動産譲渡書の調査をしている時、Office of the City Registerで簡易地図が見つかったが(図1-3)、ヘボンの地所の大きさは25 X 100.5 feetとなっており、これとほぼ一致している。

また1854年-1857年の不動産評価価格の建物の描写には、診療所は

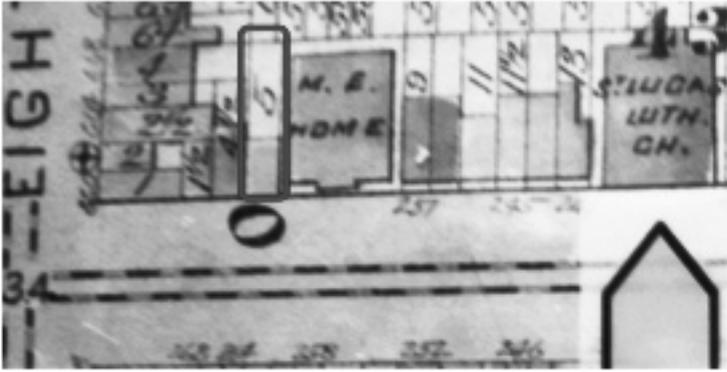


写真1-4 ロビンソン・マップ (1885年)  
実線がヘボンの家

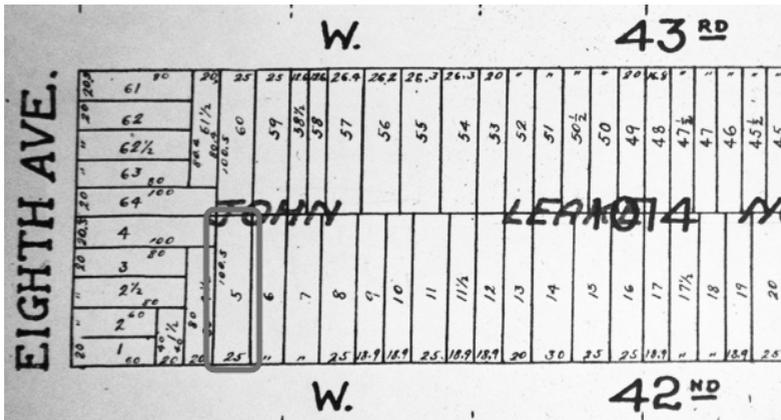


図1-3 簡易地図 (1916年)  
実線がヘボンの家

1階建てで、その敷地の建物は一軒となっている<sup>(7)</sup>。このようなデータを総合してみると、ヘボンの住宅兼診療所はこれまで言われ続けてきた「大病院」という言葉は適切とは思われない。

## 5節 家を三軒建てる

ヘボンが診療所を開業するとまもなく、ニューヨークにアジアコレラが流行し、その治療に成功したヘボンは一躍市内有数の名医として知られ、財を築いた、というのは事実であろう。実際、当時、コレラはニューヨークだけでなく、世界的に大流行しており<sup>(8)</sup>、「人種のるつぼ」であるニューヨークにコレラが蔓延するのは至極当然と言える。そこで問題にしたいのは、「ハア繁昌したかとお問ですが、幸いにして立派な家を三軒建てる事が出来るほどでした」（播本編2006：108）というヘボンの言葉である。また山本秀煌の『新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』には「患者は群衆して門前市を成すの盛況を呈した。従つて其の収入も莫大で紐育市内に三つの広大な住宅や別荘を建築するに至った」（1926：61）とある。これらの引用から、ヘボンは西42丁目159番地以外、市内に住宅や別荘があったという推論が可能であるが、それははたして事実であろうか。もしそれが本当であれば、それを裏付けるデータはあるであろうか。私が知る限り、その証拠にあたるものはどこにも見当たらない。強いて関連した叙述を挙げれば、コニー・アイランドとオレンジである。

### 1) コニー・アイランドに別荘？

『ヘボンの手紙』では、1855年8月1日に息子のカーティの死を、弟のスレーターに伝えるヘボンの手紙があり、「わたしは嬰兒をコニー・アイランドの海岸に移し、クララと看護婦とサミーとは<sup>(9)</sup>、みなそちらへ行きました」（高谷：27）と書かれている。これを読むと、コニー・

アイランドに別荘があったのかもしれないという印象を受ける。コニー・アイランドは市内のブルックリン地区にあるリゾート地である。マンハッタンに近接し、美しいビーチで人気を集めており、裕福なヘボンがそこに別荘を持つことは無理な話ではない。しかし、他に関連した叙述が見当たらないため、そこに地所をもつ必然性に欠ける。実際、ヘボンは開業後毎日患者の診断に明け暮れ、住宅や別荘を持つだけの経済力はあるとしても、別荘でゆっくりする時間的余裕はなかったのではないだろうか。

## 2) オレンジに住居？

もう一つの可能性としては、同じ1855年8月1日の手紙の中に現れる「オレンジの家」である。「ラウリー氏と友だちが親切にしてくれました。明日2時、オレンジの町に行き、午前11時オレンジの家で葬儀をいたします」(1976:28)という記述がある。この日本語はどういうことなのか、意味がはっきりしない。原文は“Mr. Lowrie and our friends are very kind. We go out to Orange tomorrow at 2 o'clock, have services at the house at 11 a.m.”となっているが、これも完全な英文とは言えない。それはともかく、このthe houseとは誰の家であり、どこのことであろうか。おそらくこの英文は“Mr. Lowrie and our friends are very kind. We go out to Orange tomorrow at 2 o'clock, having services at the house at 11 a.m.”の意味で書かれたと思われる。その書き換えが正しいとすれば、その内容は「ラウリー氏や私達の友達はとても親切です。我々は(明日の)午前11時に(カーティー)の葬儀を(マンハッタンの)自分の家で行い、明日(午後)2時にオレンジ市に(ローズデール墓地でカーティーの遺体を収めるために)出かけます」と考えられる。子供達の眠るローズデール墓地は現在イースト・オレンジ市の隣のオレンジ市にある。従ってそのオレンジというのはニュー

ヨーク近郊のオレンジ（ニュージャージー州）であり、the house というのは高谷による解釈の「オレンジの家」ではなく、「ヘボンのマンハッタンの家」と考えるべきであろう。なおオレンジと言えば、弟スレーターの住んでいたペンシルバニア州にオレンジ郡（county）があるが、そこは距離的に遠く、馬車で2～3時間で行ける場所ではないため、「オレンジの家」をスレーターの家と解釈するのも無理であろう。

## 6節 三つの広大な住宅や別荘？

そう考えると、郊外に「三つの広大な住宅や別荘」という記述自体を疑ってみる必要がある。“Hoping to return to China, they settled in New York and the Doctor went into the practice of his profession. Here they remained for thirteen years, residing in Forty-second Street, then on the outskirts of the city” (Meginess 1894: 136) を「中国に戻ることを望みながら、彼らはニューヨークに住みつき、博士は医師業務に就いた。ここニューヨークに彼らは13年間留まり、42丁目に住み、その後、ニューヨーク市郊外に住むことになった」ように解釈されることがあるが、果たして下線部は適切な解釈といえるであろうか。その英語をそのように訳すことはできないこともないが、別の解釈として「その当時はまだニューヨーク市の郊外であった42丁目に住むことになった」という考えも成り立つ。「ヘボンが住み始めた頃の42丁目は家もまばらな未開発地であった」という高谷自身の訳を冒頭で紹介したが、当時42丁目自体がニューヨーク市郊外であったという事実を忘れてはいけない。実際のところ、ヘボンの家の北側にあまり住宅が立っていないため、「その当時はまだニューヨーク市の郊外であった42丁目に住むことになった」という解釈の方が適切ではないだろうか。さらに言うと、ヘボンは13年間しかニューヨークに居なかったのであり、郊外であろうとなかろうと、その後ヘボンがニューヨーク市に住むこと

自体あり得ない。従って、郊外における三つの別荘は実際には存在せず、ヘボンの地所建物は西42丁目159番地だけであった、と考える。また1854-1857年の不動産評価価格には、敷地の中の家（Houses on Lot）の欄に「一つ」とあり、それはヘボンの資産が159 West 42<sup>nd</sup> Streetの一箇所に固まっていたことを裏付ける証拠となる。

## 7節 家の増築

そうは言っても「ハア繁盛したかとお問ですが、幸いにして立派な家を三軒建てる事が出来るほどでした」と言ったのはヘボン自身であり、それを無視することはできない。しかしこの日本語には「どこに」という記述がないから、「現在の地所に」と解釈するのが妥当だと思う。実際のところ、「立派な家を三軒建てる」というのは159 West 42<sup>nd</sup> Streetの地所に家を増築したということではないだろうか。ニューヨークを離れるにあたって“I have sold my house for \$10,000.”とあり、houseは単数になっている。従ってそれは159 West 42<sup>nd</sup> Streetの家を指しており、ヘボンの家の建物の推移を考えに入れると、正確には「立派な建物を三軒建てる」と考えるべきであろう。

ではその「三軒の建物」はどうなっていたか、という疑問が沸くが、「同じ敷地の中に三軒建てられた建物」を現存する地図上で知ることは、正直、困難である。このようにドリップス・マップ（1852年）をペリス・マップ（1857年）と比較した場合、建物の数は増えているのは確かであり、家の増築が山本秀焯の「三つの広大な住宅や別荘」を理解する上で、一番近い解釈と言えないであろうか。

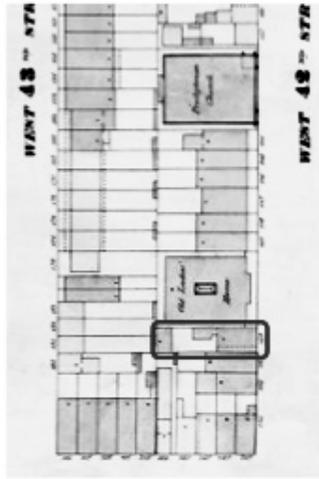
## 8節 ヘボンの資産

このようにニューヨーク時代のヘボンは事業に成功し経済的に恵まれた生活を送るわけだが、気になるのはその資産である。1850年の米国

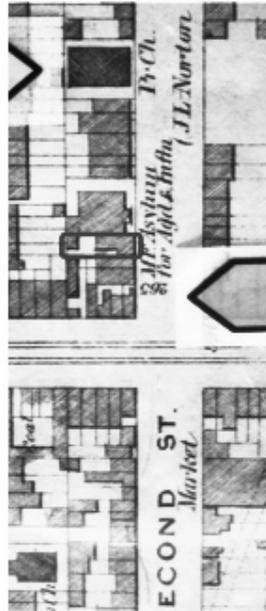
ドリックス (1852年)



ペリス (1857年)



ドリックス (1867年)



ロビンソン (1885年)

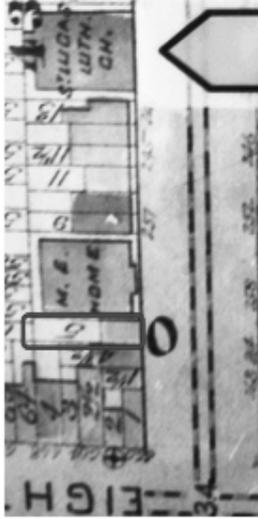


図1-4 ヘボンの家の推移

国勢調査には不動産評価価格 (Values of Real Estates owned) の項目がある。それによると 159 West 42<sup>nd</sup> Street におけるヘボンの土地、家屋の見積もりは 3,300 (3,800 とも読める) ドルとなっている。またヘボンの 1854 年 - 1857 年の課税見積もり (Tax Assessment) によると不動産評価価格は 4,500 ドルとなっている。そして既に述べたが、その後、ヘボンはニューヨークを離れるにあたって不動産を 10,000 ドルで売却しており、以上がヘボンの資産をはかる指標である。ちなみに、この 10,000 ドルはどれほどの価値があったであろうか。ヘボンは日本に行ってから伝道局 (Japan Mission) より給料が支払われるわけであるが、その 1860 年の年間の給料は 800 ドルであった。それと比較してみると、10,000 ドルというのは大変な額であったといえる。急速に成長するニューヨークのマンハッタンの、それも半世紀後には、世界の中心となるタイムズスクエア<sup>(10)</sup> 附近の 42 番通りの地所の話である。これを手放さずにいたらヘボンの富は膨大なものになっていたであろう。

## 2 章 ニューヨーク市 42 丁目長老教会 (42nd St. Presbyterian Church in the City of New York)

### 1 節 ニューヨーク市 42 丁目長老教会の歴史

東洋伝道から戻ったヘボンは、ニューヨークにおいても積極的に教会活動に参加しているから、教会はニューヨークのヘボンを知るうえに大切である。ヘボンがニューヨーク時代に所属していた教会はニューヨーク市 42 丁目長老教会 (Forty-second Street Presbyterian Church in the City of New York) という。その歴史は 30 年 (1845-1875) と短い、かなり複雑な変遷を辿っているため、まず概略を述べたい。

1844 年の末にマンハッタンの 42 丁目 8 番街に教会の設立が企てられ、1846 年にニューヨーク教区によって組織され、「ニューヨーク市 42 丁目

長老教会」となる（以降「42丁目長老教会」と呼ぶ。）教会は会衆の急増のため1862年に139 West 42<sup>nd</sup> Streetに移転する。その後、通りの住所表示に変更があり、139 West 42<sup>nd</sup> Streetから233 West 42<sup>nd</sup> Streetに変わる（場所は以前と同じ。）しかし42丁目長老教会は1875年に解散し、聖ルカ・ルーテル教会（Luke's Lutheran Church）の建物になる（写真2-1）。従って名称は聖ルカ・ルーテル教会となっているが、建物自体は42丁目長老教会のものと思われる。

以上が42丁目長老教会の略歴である。42丁目長老教会に関する古文書はフィラデルフィアの長老派歴史協会に所蔵されており、その中に『ニューヨーク市42丁目長老教会の記録—教会の起源の歴史的概略』*Records of the Presbyterian Church on Forty Second Street, in the City of New York: A Historical Sketch of the Origin of the Church* (3頁)<sup>(11)</sup>がある。その記録を基にして、以下に42丁目長老教会の出来事を年代順に具体的に紹介する。

19世紀の中頃、急成長を遂げるニューヨーク市は瞬く間に開発が進められ、市街地も現在のミッドタウンまで北上してくる。42丁目8番街の辺りに住む住民は物資だけでなく、精神的潤いも求めて集会を開き、「教会」設立の気運が高まった。1845年2月8日の記録によると、長老の一人であるジェイムズ・レノックス（James Lenox）の出資で、42丁目と8番街の角に、8番街沿い30.48m、42丁目沿い22.86m（100 x 75 feet）の土地が買われ、総工費10,225ドルで教会が建設される。J. C. ラウリー（J. C. Lowrie）が牧師を務めることを承諾し、1845年9月14日に教会は活動を開始する。そして1846年7月12日にニューヨーク教区（New York Presbytery）によって組織され<sup>(12)</sup>、「ニューヨーク市42丁目長老教会」（Forty-second Street Presbyterian Church in the City of New York）と命名される。42丁目長老教会の公式な誕生である。教会は1846年7月21日に初回のセッション（session）が開か

れ、運営員20名と新会員8名でスタートする。ヘボンの家で紹介したドリップス・マップ（1852年）を見ると、42丁目と8番街の交差点の辺りに教会があり、その建物の横にPresbyterian Church（長老教会）と書かれているが、それが42丁目長老教会である。

## 2節 42丁目長老教会におけるヘボン

その頃のヘボンの動向といえば、1946年3月15日にニューヨークに上陸後、教会から徒歩数分の西42丁目159番地に住居を見つけた。敬虔なクリスチャンであるヘボンが、マンハッタンで自分の住まいにこの地を選んだのは、すぐ近くに長老教会があったからかもしれない。ヘボンが教会員になったのは42丁目長老教会として組織化された1846年で、会員名簿の2番目に名を連ねている。その後のセッションの出欠欄には常にヘボンの名前が見つかり、30歳代の若きヘボンは教会活動に意欲的に参加していたことが窺われる。

横浜時代の話になるが、医師仲間の一人がヘボンの開業時代の様子を尋ねたことがあった。その折にヘボンは「あの頃は、医者の仕事がどんなに忙しくても、別に苦になりませんでした。それに、人間はどんなに成功しても必ず時間の余裕はあるものですよ。私は日曜日には必ず教会に出かけて行き、それどころか、聖歌隊にも入っていました。『精神一到何事か成らざらん』ですね」と応えている（佐々木 1991: 74）。

『ニューヨーク42丁目長老教会会衆一教会の記録』*The Church Record, Of the Presbyterian Congregation, Forty Second Street, New York* に、ヘボンが教会員になるのは1846年7月12日、妻のクララ Clara が教会員になるのは1846年12月21日、そして息子のサミュエル Hepburn, Samuel Dyer<sup>(13)</sup> の洗礼は1847年6月6日と記されており、ヘボン一家が教会に深く関わっていたことがわかる。ヘボンは教会が発足してまもない1846年7月から、日本に行く1859年まで長老を務め、

ヘボンの存在は教会にとっても大きかったに違いない。1859年4月24日、ニューヨークを出帆した後のヘボン夫妻についての記録も残っており、その大意は以下の通りである。<sup>(14)</sup>

次の議題が議事録に書き入れられ、その写しがヘボン博士にも送られることが、全員一致で決まった。42丁目長老教会の組織設立当初から、教会員かつ長老としてかわり、深く敬愛されてきた我同胞、ヘボン博士が、日本で医療伝道師になるため、最近我々のもとから離れて行った。だが、いかなるキリスト教教会も存在しないという国柄ゆえ、博士を我々の教会から除籍をすることはできない。従って、我々は博士を会議の欠席者として記録することを控え、博士と令夫人を、我々の優しく温かな記憶の中にとどめておくことに決まった。ご夫妻は、この教会の精神的、世俗的救心の向上に、忠誠と自制と熱意を持ってほぼ13年献身されてきており、そのことに対する我々のご夫妻への思いを、記録に書きとめておくことは光栄の至りである。我々は、ヘボンご夫妻が仕えている善良な主に、愛情と確信をもってお二人を委ねるとともに、主がその庇護と恩恵をご夫妻にお与えくださることを懇願する。主の恵みがあれば、ご夫妻は、行ってしまわれた異教の暗黒の地においても、偉大かつ永遠な祝福ある存在となりうるかもしれない。

### 3節 42丁目長老教会の移転

さて再び話は教会の進展に戻るが、1850年3月22日の記録によると、会員数は急増し142名に達する。この会衆の増加にともない、教会は広い建物を必要とし、42丁目と8番街の角の教会の建物は公売（public auction）に出される。売却後、しばらく集会場がないため仮の集会場

が1854年に40丁目と6番街に設定され、その間1854年3月17日に、西42丁目139番地（139 West 42<sup>nd</sup> Street）の土地の購入が決定する。42丁目北側の横幅が24.4メートル、8番街に並行した奥行きが32.6メートル（80 x 100.5 feet）と記されており、教会の移転となる。

ペリス・マップ（1857年）を見ると、42丁目と8番街との角から8番街を東に入った42丁目の通りの北側に長老派教会（Presbyterian Church）と記された大きな建物がある。建物番号は記載されていないが、その両側の家番号が137, 144となっているため、教会の住所は西42丁目139番地（139 West 42<sup>nd</sup> Street）と推察できる。<sup>(15)</sup>

#### 4節 住所表示変更

さて移転後、西42丁目139番地の教会は、ある時点で住所表示が西42丁目233番地に変わる。42丁目長老教会を『ニューヨーク市 教会古文書目録』（61頁）、INVENTORY OF THE CHURCH ARCHIVES OF NEW YORK CITYで調べると、以下のように書かれている。

FORTY-SECOND STREET (Forty-second Street Presbyterian Church), 1846-75. 233 West 42<sup>nd</sup> St., Manhattan. Organized 1846 by the Presbytery of New York (entry 1). Services at 139 West 42<sup>nd</sup> Street to 1862; then at above address until dissolved in 1875.

42丁目（42丁目長老教会）。1846年から1875年。マンハッタンの西42丁目233番地。1846年にニューヨーク長老教区によって組織される。礼拝は1862年までは西42丁目139番地で行われ、それから1875年に解散されるまで上記（マンハッタンの西42丁目233番地）の住所で行われる。

まず、住所表示変更前の住所が139 West 42<sup>nd</sup> Streetであることは、この記述の後半の部分で確認できる。その表記がやがて233 West 42<sup>nd</sup> Streetに変わるのである。

それを地図上で見るならば、ペリス・マップ（1857年）による139番の場所は、ロビンソン・マップ（Robinson Map）（1885年）によると、231番と241番の間になっているため、教会があった番地はその間の233番であったと考えられる。1867年のドリップス・マップで見ると、42丁目を8番街から7番街に向かって西の方に目をやると、Prchと記された建物がある。Presbyterian Churchのことである。そして、地図の42丁目の8番街のすぐ近くには265番という表示が見られるところから、この通りが200番台であると断定できる。

## 5節 42丁目長老教会の建物

42丁目長老教会はどんな建築物であっただろうか。それを知る貴重な資料として『アビシニアンからシオンまで—マンハッタンの教会の案内』*FROM ABYSSINIAN TO ZION: A Guide to Manhattan's Houses of Worship* という本を紹介する。その233頁には次の記述がある。

Founded in 1850, St. Luke's Lutheran Church moved in 1875 to 233 West 42<sup>nd</sup> Street, the former Forty-second Street Presbyterian Church

聖ルカ・ルーテル教会は1850年に設立され、1875年に西42丁目233番地に移る。すなわち以前の42丁目長老教会である。

そして、その本の説明の横にSt. Luke's Lutheran Churchという名の画像（写真2 - 1）が載っているが、それはForty-second Street Presbyterian Churchの建物であるとも言える。なぜならForty-second Street Presbyterian Churchは1875年5月10日に解散し<sup>(16)</sup>、記録も

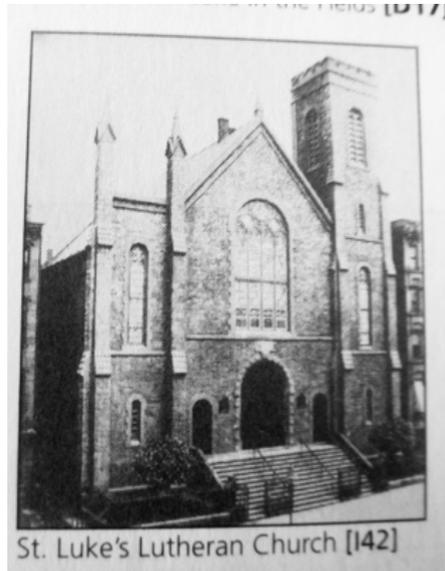


写真2-1 聖ルカ・ルーテル教会となった「42丁目長老教会」の建物

1875年5月10日を最後に終わっている。そして、聖ルカ・ルーテル教会がその場所に移るのは1875年であり、同じ年に教会を建て直すというのは現実的に不可能であるから、聖ルカ・ルーテル教会は42丁目長老教会の建物を譲り受けたと考えるのが妥当である。

### 3章 ニューヨークにおける生活

#### 1節 三子の死亡とローズデール墓地 (Rosedale Cemetery)

ヘボン夫婦はニューヨーク時代に、三人の男子に恵まれた。チャールズ (Charles) (1847年1月誕生)、ウォルター (Walter) (1850年頃誕生と推定)、カーティ (Curty) (1854年7月25日誕生) である。しかし、その三人ともそれぞれ五歳、二歳、一歳で死んでしまい、ヘボンの

悲しみは計り知れない。「わたしの胸ははりさけるほどだ。おおニューヨークは何と恐ろしい所であろうか。私に翼があったらどこか寂しい所に飛んで行きたい。これらが悪しき思いならば、神よ赦したまえ」(高谷1976:28)とある。死後、三子はニュージャージー州オレンジ市のローズデール墓地に葬られる。墓地カードの埋葬日と死因の欄には次のように記載されている。

チャールズ：1852年6月19日 しょうこう熱

ウォルター：1852年6月10日 しょうこう熱

カーティー：1855年8月22日 赤痢

さて埋葬地にオレンジのローズデール墓地<sup>(17)</sup>が選ばれたのは何故であろうか。チャールズとウォルターは二人とも1852年に埋葬されて、カーティーは1855年に埋葬されたが、ヘボンがニューヨークを去るのは1869年なので、その頃ヘボンはまだニューヨークに住んでいたのである。他の町にも墓地はあるにもかかわらず、何故ニューヨーク市から離れたオレンジのローズデール墓地が選ばれたのであろうか。紀要第44号の「イースト・オレンジのヘボン」でも述べたが、この墓の選択の事実は大切な意味を持っている。なぜなら子供の墓はヘボン夫妻が将来一緒に眠るヘボン家の墓になるわけで、子供の墓の近くに住みたいというヘボンの希望を考えれば、ヘボン自らが余生を過ごす場所の選択、という意味を持っていたからである。

子供の死はヘボンにとって突然のできごとだった。ウォルターは1852年6月8日に死亡し(司馬2011:202)、埋葬日は1852年6月10日である。チャールズの死亡は教会の記録に1852年6月18日と記載されており、同年の6月19日に埋葬されている。カーティーの埋葬はヘボン一家の墓がローズデール墓地になっているので、ウォルターとチャー

ルズの墓の選択が特に意味をもつ。6月といえば、当地はすでにかなり暑い。ウォルターとチャールズのしょうこう熱による突然の死に、ヘボンはすぐ埋葬の地を探さなければならなかったはずである。それがどうしてオレンジ市の墓地という結果になったであろうか。別の言い方をすれば、ヘボンはどうしてオレンジの隣町のイースト・オレンジを自分の永眠の地に選んだのであろうか<sup>(18)</sup>。そこでJ. C. ラウリーの存在が浮かびあがってくる。

## 2節 J. C. ラウリー

J. C. ラウリーは公私ともどもヘボンにとって影響力の強い存在であったと想像される。ヘボンが東洋伝道から戻り、1846年、42丁目長老教会の会員になった時、J. C. ラウリーはその教会の牧師だった。ヘボンの日本宣教を申し出た手紙を伝道委員会に提出するなど、ヘボンが日本に行くにあたり大きな力になった人である。J. C. ラウリーは1846-1850年の期間は、伝道局の副主事 (Assistant Secretary of the Board of the Foreign Missions) であり、その後、亡父の後を引き継ぎ伝道局の総主事 (Secretary of the Board of the Foreign Missions) になったため、ヘボンは上司のJ. C. ラウリーに日本から報告書簡を何度も送っている。また、二人には仕事を離れた個人的な繋がりもあった。私的な手紙の場合にヘボンはJ. C. ラウリーをbrotherと呼ぶこともあり、親近感と信頼感を持っていたようである。

米国情勢調査によると、J. C. ラウリーは1850年と1860年にはニューヨーク州、クイーンズ地区のニュータウン (Newtown, Queens, New York) に住むが、1880年にはニュージャージー州のイースト・オレンジ (East Orange, New Jersey) に引っ越している。ヘボンは33年間の日本滞在後、J. C. ラウリーのイースト・オレンジの家 ウィリアム通り411番 (411 William Street) に泊めてもらったり、そこから徒歩数

分の距離にあるウィリアム通り384（384 William Street）に仮住まいするなど、二人の関係の深さが感じ取れる。その後、ヘボンはJ. C. ラウリーの家から徒歩10分の距離のグレンウッド街71番（71 Glenwood Avenue）に住み、J.C. ラウリーが1900年5月31日に92歳で亡くなるまで、お互いに親しくしていたのではないだろうか。

ヘボンの三子が亡くなる1850年代には、J.C.ラウリーはまだニューヨークに住んでいたようであるが、後にイースト・オレンジに自分の住居を構えたことから判断して、イースト・オレンジの土地を気に入っていたようである。1863年にオレンジ市から分かれたイースト・オレンジは、教会の数も多い宗教性の強い町である。子供の墓、自分の定住地を決めるにあたって、その土地に不案内なヘボンはJ.C. ラウリーから色々情報を得ていたことが十分考えられる。これを立証する具体的な資料はなくても、ヘボンがニューヨーク時代から半生に渡って深い親交をまじえてきたJ.C.ラウリーは、ヘボンにとってかけがえのない存在であったことは間違いない。

### 3節 クララと息子サムエル

ヘボンのニューヨーク時代にはもう二人紹介しなければならない人物がいる。妻のクララと息子サムエルである。三子を失ったクララは悲しみの底にありながら、「五歳になるチャールズ<sup>(19)</sup>という可愛い子を失った後、ヘボン夫人はその子が通っていた小学校のクラスを受持ってその悲しみをまぎらわせた」（高谷1990：34-35）。唯一生き残った子供のサムエルはそれだけに夫婦にとって大事な存在であった。しかしそれにもかかわらず、ヘボン夫婦は、日本伝道を決心し、そのサムエルを米国に残したのである。

ヘボンとクララは一心同体<sup>(20)</sup>と言えるほど互いに同じ目標に向かって生きていた。中国の気候が体に合わず、クララが病気になったことが東

洋伝道から引き返す主な理由であったことを考えると<sup>(21)</sup>、日本に行くことに不安がなかったわけではなからう。実際、日本滞在の間、クララは日本の気候不適合による神経痛やリウマチに悩まされるが、それにもかかわらず彼女の日本伝道の決心はゆるぎないものであった。このヘボン夫婦の愛は人間的情愛を超えた、神への信仰に基づいた絆であったと思われる。と同時に、ヘボンの神への信仰とクララへの深い愛がなければ、彼女も日本行きに踏み切れなかったかもしれない。

サムエルに対するヘボンの気持ちは以下の記述からわかる。「かわいそうなサムは、エリザベス市の学校に行くため、昨日ヤング氏の家にひきとられました。母親も一緒に行き、その家に泊り、まだ帰って来ません。これがわたしの遭遇する最初の別離であり、最も堪えがたい試練でもあります。ほとんど胸もさけんばかりの悲しみでありました。しかしわたしは主なるわが神を信じております」(高谷1976:34)。日本伝道に行く目的をサムエルはわかってくれたとヘボンは思いこんでいて、「いつか近い将来、日本において、再びわたしども家族一同と一緒に住めるといふ望みを抱いております」(高谷1976:34)と書いているが、果たしてサムエルの気持ちはそれに応えたであろうか。

事実、息子サムエルは慶応元年(1865年)に横浜に住み両親の元で暮らす機会があった。横浜の日本郵船に勤め、そして行く末、スタンダード石油会社の支店長として長崎に住むことになる。言い換えればヘボン夫婦が明治26年(1893年)に日本伝道を終えてイースト・オレンジに戻っても、サムエルは一緒に戻ることはなかった<sup>(22)</sup>。ヘボンはサムエルに対して、「わたしの心を悩ますものはあの子が宗教ぎらいの点です」(高谷1976:88)と述べているが、生き方の違う息子サムエルの存在はヘボンの生涯にとって心痛の種であった。ヘボンは89歳の時の手紙で、サムエルに長崎から戻ってきて、自分の面倒をみて欲しいと強く希望する<sup>(23)</sup>。老いたヘボンの赤裸々な気持ちが人の心を打つ。しか

しサムエルにしてみると、15歳に寄宿舎に入れられ、アメリカに一人残された寂しさは一生忘れられないものであったであろう。父子の気持ちの隔たりはその頃から始まったのであろうか。サムエルは父親ヘボンに対して次のような感想を抱いている。「父の人生の唯一の目標はキリスト教でした。父のすべての行動はこのただ一つの目標に向けて集中されていました。私の印象では、控え目な性格で、社交的な生活を好まず、学問と宗教以外のことには関心がなかったようです」（佐々木1991: 32）。息子サムエルがオレンジのローズデールのヘボン一家の墓に埋葬されていない事実から判断して、父親と息子の溝は生存中はおろか、死後も埋まることはなかったようである。

## 結びの言葉

「ニューヨークにおけるヘボン」を終えるにあたって二つのことを書こうと思う。まず、今まで述べたことを各章ごとにまとめ、事実の認識を新たにしたい。もう一つは、「はじめに」で述べたように、「ヘボンにとってニューヨークとは」という命題について考察し、自分なりの解釈を示したいと思う。

### 1章 ニューヨークという地 ― 昔と今

ヘボンはマンハッタンのミッドタウン、159 West 42<sup>nd</sup>の住所に住居兼診療所を見つけ、そこをニューヨークの生活の根拠地とした。医師としてのヘボンはコレラが流行したこともあって、病院は繁盛し、一躍市内有数の名医として知られるようになった。「大病院」というイメージがあるようだが、実際にはヘボンの土地と建物（住居と診療所を含む）はさほど大きくない。また郊外に住宅や別荘を持つ、というのも根拠が薄く、誇張されたものと思われる。1,200ドルで得た159 West 42<sup>nd</sup>

Streetの地所は市の飛躍的發展もあいまって、ニューヨークを離れる1859年には10,000ドルで売れ、ヘボンのニューヨークの生活は物質的には恵まれていた。

## 2章 ニューヨーク市42丁目長老教会

ヘボンが所属した教会の起こりは42丁目と8番街の角であった。それは「42丁目長老教会」(139 West 42<sup>nd</sup> Street)として組織化され、その後、42丁目長老教会(233 West 42<sup>nd</sup> Street)へと住所表示が変わった。そして1875年に教会は解散、その建物は聖ルカ・ルーテル教会に継承された。ヘボンは忙しい医師の身にもかかわらず教会の活動に積極的に取り組み、長老としても貢献した。会員の別れの言葉からもわかるように、夫婦の日本行きはひどく惜しまれたようである。

## 3章 ニューヨークにおける生活

医療事業の成功とは裏腹にヘボンの私生活は不運の連続であった。幼い子供3人を次々に失ったヘボンとクララの気持ちは察して余るものがある。現在ローズデール墓地にヘボン家の墓があり、その前に5つの小さな墓石がある。墓石の表に向って左から順番にチャールズ、ウォルター、カーティで、その次がクララ、右端がヘボンである。つまりヘボン一家は、息子のサミュエルを除いて、みんなオレンジ市のローズデール墓地に眠っている。

J. C. ラウリーは生涯に渡ってヘボンの強力な協力者であった。42丁目長老教会の牧師であり、ヘボンの日本行きにも骨折った。伝道局の総主事になり、ヘボンはJ. C. ラウリーに日本から報告書を送り続けた。ヘボンにとって常に心のよりどころであったJ. C. ラウリーは、ヘボンの子供の墓の選択やイースト・オレンジの住居を決めるにあたって力になったであろう。

三子を失ったことはヘボン夫婦にとって、ニューヨーク時代の最大の悲しみであった。また、唯一生き残ったサムエルをニューヨークに残して日本伝道に出かけたことは、ヘボン夫婦にとって大きな心の痛みであった。人生の目標を分かち合う妻クララとの出会いはヘボンにとって最高のものであったが、一方、一人アメリカに取り残されたサムエルは父親ヘボンの宗教一徹の生き方に懐疑的であった。

### ヘボンにとってニューヨークとは

以上が各章のまとめであるが、最後に「ヘボンにとってニューヨークとは」という命題を考えてみる。まずヘボンは何故ニューヨークを選んだかという問題であるが、それについて彼自身大事な発言をしている。「1846年3月15日、ニューヨークに到着しました。ボストンを出発して、ちょうど五カ年になりました。友人の勧めで、それにまた中国に行く望みを抱いて、1846年の夏、ニューヨーク市の山手<sup>(24)</sup>に医院を開きました」(岡部 2009: 367)。この言葉から類推するに、ヘボンは米国に戻った後も再び中国に行きたいと思っていた。「中国に行く望みを抱いて」と同じ趣旨が次の引用にも見られる。“Hoping to return to China, they settled in New York and the Doctor went into the practice of his profession.” (Meginness 1894: 136)「中国に戻ることを望みながら、彼らはニューヨークに住みつき、博士は医師業務に就いた」とある。つまりヘボンは折あらば再び中国伝道に出かける気持ちをもって、上海航路のあるニューヨークに住んだと考えられる。ニューヨークには156 5<sup>th</sup> Avenueにアメリカ合衆国長老派伝道局本部 (The Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the US) がある。号令がかかれればすぐにでも手続きにかかれる、まさにスタンド・バイの姿勢である。

ヘボンがニューヨークに来る別の理由として、当時のニューヨークは人口が急増し、医師を必要としていたということが考えられる。それは

金儲けの野心ではなく、沢山の移民が病気、貧困で困っていたから、その救済の意図をもってニューヨークを選んだのだろう。ヘボンは中国では伝道活動が十分できなかったという反省から、中国伝道を再度考えたようだが、行き先が中国から日本に変わったことは問題ではなかった。神奈川に来て宗興寺で施療所を開設し、無料で沢山の患者を診たのは、ニューヨークでの医療活動を通じた救済の気持ちの延長だったかもしれない。

ニューヨークに住む理由を二つ述べたが、ヘボンの心中には常に神の信仰が動機としてあった。医者として成功を収め、経済的にも潤っていたし、42丁目長老教会では若き長老として精力的に活動し、J. C. ラウリーという無二の親友にも巡り合え、ニューヨークの生活は実に充実していた。そうであっても、突然一度に三子を失う悲しみは計り知れなく、ヘボンはニューヨークという町を憎んだ。喧騒の町、ニューヨークを嫌い、そこから離れ、自然の美しい、宗教心に満ちた人の住むイースト・オレンジのような土地に移りたいと常々望んでいた。

ニューヨークを去る機会が13年後に訪れた。日本伝道のチャンスである。日本に行くいきさつについて、ヘボンは1858年1月15日にスレーターに送った手紙の中で詳しく述べている。「わたしは伝道の命令によって、日本に宣教師として行くことを申し出ました。伝道局が日本のどこへ、わたしどもを派遣するかわかりません。しかし神の意ならば、わたしは喜んで出てゆきます。そこに行き、それらの暗黒の中に住む人々の幾人かの蒙昧を啓（ひら）き、その帝国にキリストの聖国をたてるべき器となる以外に、わたしの心を喜ばすものは何もありません。もし、神がわたしを派遣し、わたしと共にいますならば、それで満足です」（高谷1976：33）。要するに、伝道局の命令は神の導きであり、神の摂理にかなったことであれば、ヘボンは喜んで実行したいと思ったのだ。それと並行して、東洋伝道の夢を長くいだき、中国を経験したヘボンは、日本にも少なからず興味を持っていた。ニューヨーク監督教会フ

ランシス・ホークス牧師が編集したペリー提督の『日本遠征記』はヘボンの日本への興味を煽ったのではないだろうか<sup>(25)</sup>。東洋の島国、日本は、よく西洋人が東洋に抱くイメージのように、ヘボンにとってどこか神秘的な地に思えたのかもしれない。そして、その日本は平和で穏やかなイースト・オレンジの情景とオーバーラップしていたのかもしれない。伝道局の委員会は前々から日本へ宣教師を派遣する意向をもっていた。ペリーの日本遠征に同行したS・W・ウイリアズ<sup>(26)</sup>（佐々木 1991: 75-76）の書簡は、伝道局の委員会に日本に宣教を開始することをすすめる、その最初は医師であることを勧告した。ヘボンの日本宣教を申し出た手紙をラウリーが委員会に提出することによって、委員会はヘボンの副宣教師としての派遣を満場一致で承認した<sup>(27)</sup>。

日本に行くことで失うものは沢山あった。夫妻の心の故郷である、亡き三子の眠るローズデール墓地から遠く離れること。将来を約束された病院をやめ、42丁目の地所や建物を手放すこと。42丁目の教会の友に別れを告げること。老いた両親を遠いペンシルバニア州のロックヘブンに残すこと<sup>(28)</sup>。そして、さらには息子サムエルを米国に残すという大きな問題があった。エリザベス市の学校に行かせるため、サムエルをヘボンの知り合いのヤング氏の家にあずけた。以上、ニューヨークを去るには計りしれない難題があった。ヘボンはそれらの犠牲の一切を越えて日本宣教の決心を固めたのだった。日本にキリストの聖国をたてるという神の意思に従い、東洋の第二の伝道に旅立ったのだ。そのヘボン夫妻の心の深さと強さには感極まるものがある。

## 註

- (1) 私は現在、米国、ニュージャージー州のウエイン市に住み、その市にあるウィリアム・パタソン大学（William Paterson University）に勤務している。

(2) ニューヨーク市は東西に走る通り「丁目」と、南北に走る通り「街」で区別し、5番街を中心に東に行くと4番街, 3番街, そして西に行くと6番街, 7番街となっていく。

(3) ニューヨーク市の入植

By the 1880's, both the Irish and the Germans had established themselves in New York City economic and political life and by 1909, they were no longer seen as a threat to the so-called American way. However, in late 1880s, a second wave of immigration began which consisted of Polish and Russian Jews, southern Italians, as well as a spattering of Greeks, Poles, Hungarians, Romanians, Bohemians, and Chinese. Between 1880 and 1919, 17 million immigrants passed through the Port of New York. Most of these immigrants settled in cities, including five out of six Russian Jews and three out of four southern Italians, and many remained in New York City.

出典：[http://www.fordham.edu/academics/colleges\\_\\_graduate\\_s/undergraduate\\_colleg/fordham\\_college\\_at\\_l/special\\_programs/honors\\_program/hudsonfulton\\_celebra/homepage/the\\_basics\\_of\\_nyc/immigration\\_32224.asp](http://www.fordham.edu/academics/colleges__graduate_s/undergraduate_colleg/fordham_college_at_l/special_programs/honors_program/hudsonfulton_celebra/homepage/the_basics_of_nyc/immigration_32224.asp)

(4) ヘボンの不動産譲渡書, (Deeds 112) Blocks 1010-1019は Office of the City Registerにある。正式名称は次のとおりである。

NYC Department of Finance

Division of Land Records

Office of the City Register

66 John St. 13<sup>th</sup> Floor (Deeds & Mortgages)

[http://www.nyc.gov/html/dof/html/property/property\\_rec\\_deed.shtml](http://www.nyc.gov/html/dof/html/property/property_rec_deed.shtml)

(5) マーガレットL. キャンベルの不動産譲渡書もヘボンと同じ Office of the City Registerにある。マーガレットL. キャンベルは1897年に家をカニングハム Cunningham に売る。Cunningham - FORTY SECOND STREET MANHATTAN VILLE 7 ST NICHOLAS AVENUE RAILWAY COMPANYとなっているので鉄道会社であろう。

(6) 以下の地図はNew York Public LibraryのMap Collectionに所蔵されている。

ドリッパス・マップ (1852年) *Maps of the city of New York extending northward to Fifth St.* Dripps, Matthew.

ペリス・マップ (1857年) *Maps of the city of New York.* Perris, William.

ドリッパス・マップ (1867年) *Map of New York and vicinity.* Dripps, Matthew.

ロビンソン・マップ (1885年) *Atlas of the city of New York.* Robinson, Elisha.

- (7) Tax Assessment No.183, Record of Assessment Manhattan 22nd Ward 1867 (I) – 1870 (I) 不動産評価価格の情報は Municipal Archives (31 Chambers Street, Room 103 New York, NY 10007) にて取得した。

<http://www.nyc.gov/html/records/html/about/archives.shtml>

- (8) コレラ：「1826年から1837年までの大流行は、アジア・アフリカのみならずヨーロッパと南北アメリカにも広がり、全世界的規模になった。以降、1840年から1860年、1863年から1879年、1881年から1896年、1899年と1923年と、計6回にわたるアジア型コレラの大流行があった。」

出典：<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%AC%E3%83%A9>

- (9) 原文は「クララと看護婦とサミーとは、みなそちらへ行きました」となっているが、「サミーは」の誤りであろう。

- (10) タイムズスクエア：Times Square is a major commercial intersection in Midtown Manhattan, New York City, at the junction of Broadway and Seventh Avenue and stretching from West 42nd to West 47th Streets..... According to *Travel+Leisure* magazine's October 2011 survey, Times Square is the world's most visited tourist attraction, bringing in over 39 million visitors annually.

出典：[http://en.wikipedia.org/wiki/Times\\_Square](http://en.wikipedia.org/wiki/Times_Square)

- (11) 『ニューヨーク市42丁目長老教会の記録—教会の起源の歴史的概略』(3頁目) (*Records of the Presbyterian Church on Forty Second Street, in the City of New York: A Historical Sketch of the Origin of the Church*) (p. 3).

- (12) システムとしては大教区 (Synod) の下に小教区 (Presbytery) があり、その下に個々の教会が存在する。

- (13) 一般的にHepburn, Samuel Davidとして知られているが、『ニューヨー

ク42丁目長老教会会衆一教会の記録』*The Church Record, Of the Presbyterian Congregation, Forty Second Street, New York*ではHepburn, Samuel Dyerとなっている。

- (14) ヘボンが日本へ行った後のSessionのMinute (pp. 86-87) は*Records of the Presbyterian Church on Forty Second Street, in the City of New York: June 10<sup>th</sup>, 1859*にある。以下はその全文である。

It was unanimously resolved that the following minute be entered upon the Records of Session and a copy of the same sent to Dr. Hepburn. Whereas our well beloved Brother Dr. J. C. Hepburn who has been connected with the Forty Second Street Presbyterian Church as a member & Ruling Elder from its organization, has recently left us to become a medical missionary in Japan, & whereas he is unable to take his dismissal from us on account of the fact that no Christian Church exists in that Empire, therefore Resolved, that while we abstain recoding his name as absent from our meeting, we will still remember him and his excellent wife with tender affection. We esteem it a privilege to record our sense of the faithfulness, self-denial and zeal with which during nearly thirteen years they have devoted themselves to promote the spiritual and temporal interests of this Household of Faith. We commit them in love and confidence to the good Lord whose servants they are, beseeching his protecting care and the grace which may enable them to be a great and lasting blessing in the land of heathen darkness to which they have gone.

- (15) 追加的説明をすると、ペリス・マップが1857年にでき、その段階では139番になっているが、1885年にできたロビンソン・マップでは233番と考えられるため、住所表示の変更は1857年から1885年の間にあったと考えられる。
- (16) 1873年10月15日の記録の210頁には教会の経営が苦しいと述べられているので、教会の解散は負債によるものだったであろう。
- (17) ローズデール墓地については、詳しくは紀要第44号「イースト・オレンジにおけるヘボン」240頁を参照。
- (18) 1892年3月30日のTHE JAPAN WEEKLY MAILによると、夫妻は

三子の眠っているローズデール墓地の近くにいたかった、とある。

“We lived in this temple, which has been cleared of its idols, for three years, and then at the insistence of the Japanese government we moved over to Yokohama, and there we lived until 1892, when we came home, and made our home here in East Orange, because we wanted to be near the graves of our boys, who lie in Rosedale cemetery.”

- (19) 原文は五歳になるチャールズとなっているが、誤りであろう。
- (20) わたしは派遣される所以外には、走りたくありません。天の父が命じたもう所に行き、働くことが、わたしの唯一の望みです。これがわたしがなさんと努めてきたことなのです。神の摂理が、わたしを日本に導きつつあり、わたしが志した、その働きにわたしを配慮し給うたと考えるからです。わたしは、これら一切を神にゆだねます。神よ願わくばわたしを正しく導きたまわんことを、クララはこれらすべての方針において、わたしと一つ心です（高谷 1976: 33）。
- (21) クララが中国の気候に合わなかったため、日本派遣となったことが以下に述べられている。His wife shared his desire and they applied to open a mission in Japan and, as the climate of that country was believed to be better for D. and Mrs. Hepburn than that of China, they were given that assignment. (Brown 1936: 691)
- (22) ヘボン没後、1906年4月3日サムエル夫妻は山の手自宅の庭園に咲いていた白木蓮を教会に持ってきた（高谷 1989: 399）。サムエルは1889年6月1日から1891年6月10日の期間、日本郵船汽船の横浜支店長として勤務している（『日本郵船の100年史』、石川潔、横浜指路教会）。
- (23) 1904年12月22日付けのヘボンのグリフィス宛の手紙。“I am alone in my house with a servant to care for me. I am waiting to hear from my son, who is at Nagasaki in business for the Standard Oil Co. -- I have urged him to come home and occupy my house and to take care of me. I cannot hear from him before the middle of Jan. next, until then I am uneducated what to do. I cannot now give a positive answer to your request about my papers, etc.” 出典：「イースト・オレンジにおけるヘボン」（渡辺 2011: 252-253）

- (24) 「上手」の誤りであろう。
- (25) 「ヘボン博士はニューヨーク監督教会フランシス・ホークス牧師が編集したペリー提督の『日本遠征記』を興味深く読んでいた。日本帝国が長く拒んできた西洋文化とキリスト教に対して門戸を開くことを意味するハリスの条約を読んだときのヘボン博士の喜びはひとしおであった」(佐々木1991: 75-76)。また、以下の引用ではヘボンとペリーは同時期に近所に住んでいたことを伝えている。「そんなニューヨークの街へ、1855年1月12日。あの男が帰って来た。ペリーである。彼が帰国後の新居をかまえたのは、32丁目(No. 38 West 32nd street)。ヘボンの病院は42丁目だ。二つの通りの間は、わずか800メートルであった。ペリーは、その同じ街で日本遠征記を編集した。」(丸山2009: 212)
- (26) S・W・ウイリアムズ: 1853年のペリー提督の日本来航の通訳官であり、翌年の日米和親条約の締結に尽くした。
- (27) 「(ウイリアム) 同氏の書簡はオリファント氏にあてたもので、日本に宣教を開始することをすすめ、しかも最初に派遣さるべき宣教師は医師であることを勧告してきたのです。アレキサンダー博士は、その書簡を読みました。ラウリー氏は、それから日本の宣教を申し出たわたしの手紙を委員会に提出したのです。そこで委員会は、それを採択し、満場一致で、わたしの申し出を受託し、この使命にわたしを任命したのです」(高谷1976: 29-30)。
- (28) 実際、ヘボンは故郷の人に会いに行って日本宣教に一応の賛同は得られたが、日本の国民に福音を伝え、救い主の繁栄をヘボンが望むほどの理解は得られなかったと感じた。

## 引用文献

- 岡部一興(編)『ヘボン在日書簡全集』教文館2009年
- 佐々木晃(訳)『ヘボン—同時代人の見た—』教文館1991年(Griffis著)
- 司馬純詩「アジアが遠くにあった頃—ヘボンのアメリカ—」『明治学院大学キリスト教研究所 紀要』第42号2009年
- 杉田幸子『ヘボン博士の愛した日本』いのちのことば社フォレストブック2006年
- 高谷道男『ドクトル・ヘボン—伝記・ドクトル・ヘボン』大空社1989年(牧

- 野書店1954年版の復刻)
- 高谷道男『ヘボン』吉川弘文館1986年
- 高谷道男『ヘボンの手紙』有隣堂1976年
- 播本秀史(編)『明治学院歴史資料館資料集』第3集 明治学院歴史資料館  
2006年
- 丸山健夫『ベリーとヘボンと横浜開港』臨川書店2009年
- 山本秀煌『新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』聚芳閣1926年
- 渡辺英男「イースト・オレンジにおけるヘボン」『明治学院大学キリスト教  
研究所 紀要』第44号 明治学院大学 2011年
- 42<sup>nd</sup> Street Presbyterian Church in the City of New York. *Records of the  
Presbyterian Church on Forty Second Street, in the City of New York:  
A Historical Sketch of the Origin of the Church* 『ニューヨーク市42丁  
目長老教会の記録—教会の起源の歴史的概略』. June 10<sup>th</sup>, 1859.
- 42<sup>nd</sup> Street Presbyterian Church in the City of New York. *The Church  
Record, Of the Presbyterian Congregation, Forty Second Street, New  
York* 『ニューヨーク42丁目長老教会会衆—教会の記録』. PA: Griffith  
and Simon.
- FROM ABYSSINIAN TO ZION: A Guide to Manhattan's Houses of Worship*  
『アビシニアンからシオンまで—マンハッタンの教会の案内』. New York:  
Columbia University Press, 2004.
- THE HISTORICAL RECORDS SURVEY. *INVENTORY OF THE CHURCH  
ARVHIVES OF NEW YORK CITY* 『ニューヨーク市教会古文書目録』.  
MARCH, 1940.
- Brown, Arthur Judson. *One hundred Years*. NY: Fleming H. Revell Company,  
1936.
- Jackson, Kenneth T. *The encyclopedia of New York*. New Haven & London:  
Yale University Press; New York: The New York Historical Society,  
2010.
- THE JAPAN WEEKLY MAIL*. March 30, 1892.
- Meginness, John, F. *Genealogy and History of the Hepburn Family of the  
Susquehanna Valley, with reference to other families of the same name*.  
PA: Gazette and Bulleting Printing House. 1894.